



2022年度 事業報告書

2023年 7月31日
特定非営利活動法人ワークレッシュ

目次

I	事業期間.....	- 2 -
II	事業の実施状況.....	- 2 -
I	特定非営利活動に係る事業.....	- 2 -
	(1) ~子どものためのコミュニティ・スペース~ワークレッシュ.....	- 2 -
	(2) 児童発達支援・放課後等デイサービス フェイス.....	- 5 -
	(3) 大阪狭山市市民公益活動促進補助金事業「市民の学び屋 ^{ガッチャ} Gatcha!」.....	- 8 -
2	その他の事業.....	- 9 -
III	事業の成果と課題.....	- 10 -
	(1) ~子どものためのコミュニティ・スペース~ワークレッシュ.....	- 10 -
	(2) 児童発達支援・放課後等デイサービス フェイス.....	- 12 -
	(3) 大阪狭山市市民公益活動促進補助金事業「市民の学び屋 Gatcha(ガッチャ)!」.....	- 19 -
IV	理事会その他会議の開催状況.....	- 21 -

I 事業期間

令和4(2022)年4月1日～令和5(2023)年3月31日【第21期】

II 事業の実施状況

I 特定非営利活動に係る事業

(1) 事業名 ～子どものためのコミュニティ・スペース～ワークレッシュ

【概要】 会員制・予約制の子どものための子どもの家(認可外保育施設)の運営
食事提供・送迎サービス、種々の体験活動・交流機会の提供

【実施場所】 大阪狭山市大野台7丁目18番3号

【実施日数】 81日(保育70日、イベント11日)

【利用人数】 延べ140名(保育利用91名、イベント参加49名、前年度より931名減少)

【開設日時】 火～金 10時～13時

依頼に応じて時間外対応

【対象者】 生後4か月以上の利用会員
家庭の児童、1日利用定員
5名(小学生以上可)

【方針】

- 年齢・校区を問わない夜間までの地域の子どもの居場所づくり
- 公的資金を伴わない、行政サービスの行き届かない領域の子ども・子育て支援と、コミュニティの関係づくり



日中から夜間までの間や学校の長期休業日に、保護者が就労、育児・介護、疾病等により、子どもを保育することが出来ない場合などに、遊びと学習環境、安全で自立的な暮らしの場を子どもたちに提供する。

子どものためのコミュニティ・スペースとして、レクリエーションや学習、生活全般を通して、子ども同士、関わる人たちとのコミュニケーションの機会を提供する。

子ども・保護者からの種々の相談に応じる。さらに、地域活動に積極的に参加し、会員相互のみならず地域との交流を促し、地域福祉力の増進に寄与する。

「しんどいときは、SOS！ 助け合うのが当たり前」(定款第3条【目的】意識抜粋)の精神で、地域社会で自分たちが担うべき役割や力を自覚し、住民経営によるコミュニティ・スペースづくりを堅持しながら、独自性と普遍性を表現していく。保護者の都合や希望を受け止めるだけでなく、子ども自身の主体的な意思やニーズをとらえ、育児や地域生活、各自の仕事を応援するため、自らの五感を軸に「プラスワンの親切」を実行する。



- ① 風土や草木にふれて、心や感性を育み合う
- ② 商業主義にのらない文化や暮らしを体感する
- ③ 多様な人々や動植物が直にふれあう場をつくる
- ④ 社会に目を向け、地域に出掛け、出会い、知る

【実施状況】

■ 保育≡フェイス≡イベント≡働く場 としての融合

2022年度年間指導計画（健康・環境・人間関係・表現・言葉のテーマとねらい）を設けたが、出席児童の諸状況を考慮の上、個々の発達段階や意欲・関心に沿って活動できるようにした。平日は、通園施設等の終了後の時間外利用や、保護者の外出時の一時保育が殆どであった。保護者の所用に合わせた他府県在住からの家庭（きょうだい）の年一度の休日利用が復活し、再会を喜びながら遠足に赴いた。日常的には、前年度からの馴染みの友人関係同士の、日程を合わせての出席も度々あった。避難訓練や外出予定を合わせたり、フェイス児童のみならずスタッフの家族ぐるみでの交流機会ともなった。



■ 講座やイベントの企画運営

月1～2回の体験活動（全11回）

後述するフェイス事業と市民学び屋^{ガッチャ}Gotcha!の活動と日程を合わせることで、相互交流を図った。馴染みのメンバーが定着し、安定した運営状況だった。下半期からの^{ガッチャ}Gotcha!食の部活動には、未就学児の会員たちが率先して参画し、メンバーの一員として活躍した。

実施テーマ

工作&パフェ作り・花の文化園&くろまるの郷遠足（フェイスと合同*）・みるコンサート物語『100万回生きたねこ』観劇*・ワークレッシュのなつまつり・信貴山のどか村遠足*・クリスマス会*・Gotcha!食の部活動（①焼きそば作り ②巻き寿司 ③7丁目のうどん会 ④こなもん・⑤魚をサバいて和定食・⑥豚まん&ODEN）

この他、ワークレッシュのなつまつり（8月11日（祝）14～16時）を、大阪狭山市立公民館 多目的室にて実施。旧知の支援者の強力なボランティア体制や、主にフェイスのご家族の運営協力が得られ、初の自主開催だったが、盛況に終えることが出来た。

歌『ワークレッシュの夏祭り』

https://youtu.be/o6n_IYJSDjc



◆出張保育 依頼・実績なし

◆地域イベントへの参加

飲食の模擬出展が叶わない中でも、定着したヨーヨーつりに加え、フォトフレームづくりのコーナーを新しく導入した。子どものみまたは家族連れ等参加者の滞留時間が長く、人気を博した。旧職員の運営協力もあり、再会の場面も多く、大切な季節行事となっている。



▲講師派遣の仕事

11月5日(土)「はばたきフェスタ」

於) 大阪狭山市立公民館

11月26日(土) 南第二小校区の地域ふれあい交流イベント「ふくふくフェスタ」

於) 大阪狭山市立南第二小学校グラウンド

2023年1月8日(日)「新春こどもまつり」

於) 大阪狭山市立公民館

2023年2月11日(土)

わくわく市民活動・ボランティアフェスティバル「第1回わくフェス」

於) 大阪狭山市立公民館



【収入】 676,770 円

【支出】 975,814 円 **-299,044 円**

(2) 事業名 児童発達支援・放課後等デイサービス フェイス



【実施場所】大阪狭山市大野台7丁目18番3号

【実施日数】281日（休日：日曜、国民の祝日に関する法律に規定する休日、8/12～8/17、9/3、12/29～翌年1/4、3/31、臨時休業11/7～11/10）

【開設時間】平日：12時30分から18時30分
土曜・長期休暇中：10時から18時
[保育所等訪問支援：火～金10時から12時]

【対象】2歳～18歳の児童 24名（2023年3月末現在）

【利用人数】放課後等デイサービス・児童発達支援：延べ2,632名
（契約24名うち未就学児6名/20家庭）
1日平均9.4名（定員10名・欠席加算含まず、新型コロナウイルス特例による請求1件含む）
保育所等訪問支援：86件（契約6名うち小学生3名、未就学児3名）

【目的】利用する児童の健全な育成を支えるため、身体及び精神・環境に応じて、日常生活における基本的動作や知識技能の習得、並びに集団生活に適應するための指導訓練等を提供し、生活能力の向上と地域社会との交流を図る。

- 他者との信頼関係の形成
- 友達と過ごす心地よさや楽しさを味わう
- 葛藤を調整し、主張し、折り合いをつける
- 自己選択/自己決定



保育所等訪問支援においては、児童本人に対する間接支援、集団生活への適應や、存在・表現理解のための相互支援を促す。また、訪問先施設の保育士等との支援方法の共有、保護者との情報共有・連携を率先して担う。

【内容】

<児童福祉法に基づく指定障害児通所支援事業>

■ 児童発達支援・放課後等デイサービス

子どもの発達過程や特性、適應行動の状況を了解した上で、一人ひとりの置かれている状況や願いに即した個別支援計画を作成し、発達支援等を行った。下記の2)基本活動以下の活動を複数組み合わせることで日常のスケジュールを構成し、1日30分の集団療育プログラム（通称PA、パーソナル・アクティビティ）を毎日実施した。



1) 個別支援計画の作成

全児童について年間で2通作成し、下記の具体的支援を進めた。

2) 基本活動

ア 自立支援と日常生活の充実のための活動

持ち物管理・手洗いうがい・身支度・身だしなみ・身体の清潔・外食・入浴/食事マナー・買物・掃除・健康管理（柔軟体操・ストレッチ・筋トレ・竹踏み・ウォーキング）・身体/体力測定・学習・あいさつ・言葉遣い・送迎ルール・交通マナー・作物と生物の世話・個人のリクエストによる遊具や教材の導入・PC操作・個別支援計画に基づく外出・懇談



イ 集団生活の中で成功体験の積み増しを促し、自己肯定感を育む活動

仲間を意識したルールのある遊び・チャレンジカードによる目標管理と自己評価・目標やコメントの発表・イベントの企画実施・日/週/月や時節毎のふりかえり・ミニコンサート・子ども会議・子どもアンケート・お楽しみ会・避難訓練・自己防衛トレーニング・身体と心の学び・応急手当ワークショップ



ウ 創作活動

季節行事（花見/たけのこ掘り/夏まつり/クリスマス会/忘年会/卒業パーティー等）・フォトカード作り・絵画・壁面装飾・自分たちの居場所作り・献立調理（収穫/仕入れ/買い物/おやつ・食事作り）



エ 余暇の提供

自由時間の室内遊び（アナログゲーム・コミュニケーションゲーム・パソコン・タブレット）、屋外遊び（ジョギング・サッカー・野球・ドッジビー・体操）、遠足・外出（ロケット公園・船渡池公園・荒山公園・錦織公園・杉村公園・寺ヶ池公園・東大池公園・信貴山のどか村・大阪府立自然史博物館・長居植物園・近つ飛鳥博物館・天野街道散策・副池散策・石川・花の文化園・図書館・公民館・初詣・新年会・映画鑑賞・芸術鑑賞・プラネタリウム・泉佐野漁協・ラウンドワン・外食・喫茶懇談）、個別の休息時間と場所の確保



3) 学校・保護者・地域との連携

ア 将来の自立や地域生活を見据えた活動

障害児通所部会（通称こどもおすぶ会）会合と研修の参加・他事業所訪問・保育所等訪問支援の活用・ケース会議への出席・避難/防災訓練・AED初動演習・保護者交流会・個人懇談・保護者アンケート



イ 地域交流の機会の提供

初詣・保育部門との合同イベントや日常交流・地域探検・ボランティアや視察の受入れ・近隣の就労継続支援事業所の運営する店舗を訪問・食の部活動・地域イベント参加（ふくふくフェスタ等）・イベント模擬店の店番



4) 介護サービス

更衣、排泄等の身体介助
年齢に関わらず、可能な限り同性介助を行った。



5) 送迎サービス 4,773 件 (1 日平均 16.9 件)

法人が所有または借用する車両により、利用者の自宅又は学校と事業所との送迎を行った。専属ドライバーは登用せず、児童の直接支援に携わる指導員が運転手を兼任している。「送迎についての指針・要領 (ガイドラインとポイント)」を 10 月に改訂、個々の児童・家庭毎に定めた「送迎の留意点・要領一覧表」を 4 月と 11 月に改訂。運転技能実習や運行時及び添乗中のルール・マナーの継承を行った。会議等で定期的に内容の見直しや修正を継続した。

6) 給食サービス

身体の発達状況や嗜好に配慮した献立を提供し、必要に応じて介助した。子どもたちだけでなく職員やボランティアスタッフも出来るだけ一緒に食事を楽しむようにしている。適時、児童が調理や配膳等の役割を担った。



■ 保育所等訪問支援

1) 児童本人に対する支援

月 1、2 回の授業・生活の観察

2) 訪問先施設の保育士等に対する支援

報告書の提出、支援方法の共有

3) 関係者との相互の協力体制や信頼関係を構築

相談支援機関や園・学校、近隣事業所との関わりを重視

4) 担い手の養成・ノウハウ伝授

受け入れ側の許可を得て、一部 2 人体制を再開



【収入】34,671,157 円 (施設等受入評価益・V 評価益含む)

【支出】32,409,032 円 (施設等評価費用・V 評価費用含む)

+2,262,125 円



(3) 事業名 大阪狭山市民公益活動促進補助金事業「市民の学び屋 ^{ガッチャ} Gatcha!

① ことばワークショップ <講座 5 回・交流会 1 回>

- ◇実施日時 10/21,11/18,/12/16,2/17,3/17 いずれも第三金曜 18:45~20:45
- ◇市立公民館 多目的室/会議室 ◇企画/交流会 3 回*(12/10.1/21.4/23)
- ◇参加人数 延べ 68 名(内児童 2 名、オンライン 11 名)

② 食の部活動 <開催6回>

- ◇実施日時 9/24.10/22.11/19.12/26.1/28.2/25
- ◇市立公民館 調理室 大野台 7 丁目自治会館
- ◇参加人数 延べ 151 名(スタッフ・アシスタント含む。大人 64 名、児童 87 名)

【対象者】大阪狭山市民および市内に通学または就業している人

【目的】

ことばと食をテーマにした連続講座を行う。年齢層は問わないが、食の部は主に児童を対象とする。人と人をつなぎ、自身の心身を養う「ことば」と「食」を焦点に、社会生活の中で不足しがちな体験学習や交流の機会を回復し、獲得していく契機とする。日常生活や仕事であつかう言葉や表現、調理や食事にまつわる一連の工程や作法について、多様な市民が共に受講し実践してみることで楽しく学びとり、実生活に活かしていけるようにする。参加者相互の学び合いと交流を通じて、地域コミュニティにおける世代を超えたつながりを回復し、人と心地よく付き合っていく力と知恵を養っていく。

「ことばワークショップ」は、ニュース、SNS、看板・チラシなどの掲示物、報告書などビジネス用語、メール、敬語など、身の周りの様々な言葉表現のよくある間違いや誤解を見出して修正し、読解力をつけ、さらには伝えたいことを的確に表現できるよう、ワークショップ形式で学ぶ。

「食の部活動」は、調理実習と食事会。テーマとして、電化製品以外の様々な道具(包丁・すりこぎ・缶切り等)を使う・魚をさばく・献立をたてて仕入れをする・箸や食事の際のマナー・清掃など、現代的で簡単便利な食生活ではだんだん触れられなくなっている道具や材料を扱う。いずれも、参加者の交流と協力を主眼において運営する。





【収入】 305,872 円 (内市補助金 169,000 円)

【支出】 407,736 円 **-101,864 円**

2 その他の事業 実施せず

Ⅲ 事業の成果と課題



(1) ～子どものためのコミュニティ・スペース～ワークレッシュ

● 日常の保育現場と運営

4月、開設時間帯を大幅に縮小した。(2021年秋に決定)

保育事業の改編について(ブログ) 2022年4月1日 <https://onl.bz/ZuUWQid>

これによって、大きな集団での日常の保育にはない、子ども一人一人の魅力や心の機微、息遣いもじかに伝わってくる保育を実現し、保護者と本人の願い、一人一人の生活リズムや成長度合いを、可能な限り個別にかつ多様に見て取ることができるよう、時に応じたそれぞれの過ごし方や丁寧な個別対応を叶えたかった。また、保護者の方々ともっと関わる機会やお話できる時間が持ちたいという昨年度の反省を踏まえ、往復送迎時やメールでのやりとりを大事に保った。

商いとしての成果はここでは措くとして、おおむね満足の内いく関わりが叶った。フェイスの職員や児童らと共に生活(保育時間)を体験するだけでなく、訪問支援員(保育士)の実子の保育利用や、フェイス利用家庭の親御さんがCS部門の請求事務を一手に引き受けたりと、超小規模とはいえ、働く場と子育てが循環する理想的な姿が実現していた。



本来ならば、顧客となる対象を絞ってPRし、関係者や地域社会に対して寄付・協力等と呼びかければNPOの自主事業としての運営継続は叶ったであろうし、社会的な役割も担っていたと思う。事業縮小は実質的には担い手不足が主な現金であったが、2022年度に認可園等に就園していく会員が大半であることや、新規利用会員層拡大を成せなかったことも要因。その状況下での個別ニーズに応じるためにも、利用会員の積極的な募集活動はしなかった。問合せ・見学は5家庭に留まった。保育の依頼のある日にスタッフを配置するようにし、施設長が送迎や調理、管理業務を中心となって担当した。

● 次なるミッション挑戦のために

2023年2月にフェイスの事業譲渡を決めた後も、本部事務所(大野台6丁目)敷地内で認可外保育施設を継続できないか、可能性を模索していたが、年度末に閉業を決めた。

コロナ禍で心身の成長に大きな影響を受けたのが、子どもと子育て家庭。家庭内やネットに留まった親子の、本来群れて遊び学ぶはずの自然体験・生活体験の機会は減少し、家庭の養育力や経済的文化資本の相違によるこどもの体験格差・体験格差が加速している。



学習や娯楽のツールが一気にデジタル化・オンライン化していったことも、子どもの心身の発達停滞が懸念される要因のひとつである。とりわけ幼児から学童期の子どもの発達保障や、子どもを中心とした人と人との交流、その回復の機会提供は、私たちの社会的役割なのだと思う。



15年ほど前から「日月火水木金土に触れる毎日を」とのキャッチフレーズを用いてきたが、「毎月を」とするぐらいでちょうど良いのでは・・・、と弱気になるほどの簡単便利な現代的消費生活。第3次産業に偏りつづける、郊外都市に住まう人々の生業の変容ぶり。加えて、コロナ時代が拍車をかける「デジタル」社会。世間の閉塞感や地域コミュニティの希薄さ、分断、孤立は、もはやそれが通常の状態であり、大きな問題にもならない。子どもの貧困やヤングケアラーという用語も、定着してしまった。

しかし、悶々とばかりしてはいられない。法人化する前の任意団体ワークレッシュ・プロジェクト(2000年発足)からこれまでに蓄積された経験的財産や人々との縁と時間を、これからどう活かしていったら良いか。次年度は、講座の企画運営および地域イベント等への参画によってコミュニティ・スペースとしての機能を維持しながら、以降の法人としての責務と事業展開について熟慮する期間としたい。

ご支援のお願い【寄付・賛助会員】

本

ページをご覧ください。ありがとうございます。
おかげさまで、これまで応援して下さった方々からの心強い思いの長いご支援が実るかたちとなり、2022年7月15日付で認定NPO法人となることができました。
これからも、子どもたちの幸せと生きる力につながる活動に、まい進し
てまいりたいと思います。

現在のところ、今後新たにあるべき事業展開をどうしていくべきか、定められていませんが、方向性としては、どの子どもも参加できる居場所づくりとコミュニティの形成を、とりわけ、子どもたちや立場の弱いとされている人たち自身が参画し、はたらき、喜んでいける場の持続的な運営(できれば自然豊かな地で!)を目指しています。



<https://workcreche.org/donate/>

(2) 児童発達支援・放課後等デイサービスフェイス（Ⅲ 事業の成果と課題）



● 主要な療育の取組・方針

9期目は「丁寧な関わり」～大切に扱われ、存在や言動を認め合う実感を重ねる～

■ P.A.（パーソナル・アクティビティ）の月間テーマ

- 前期 <新学年になれる、やってみよう>
- 夏休み <ルール、夏を楽しむ>
- 後期 <運動、ルール・マナー、季節を楽しむ、はたらき・はたらく、考える、運動、ふりかえり>

● 計画のふりかえり・現場からの所感

「一人一人が、一緒に」融合していった1年

年度初めから、まだよくわからない‘コロナ’の状況と‘マスク’の窮屈さ、様々に制限されてきた活動の中で不足し、大人も子どもも、取り返さないといけないことが如実に現れてきた。それは、人とのかかわり。この子どもたちの心身の傷つきや育ちの抜け落ちを、「身近な人から大切に扱われ、存在や言動を認められる」という、実感を伴う直接的な所作・言動の経験で補って、重ねつなぎ合わせていくことを重視した。「支援」とは何か、もう一度考えたい。そう訴えて始まった2022年度でもあった。しかし、急いでも仕方がない。もう一度きちんとゆっくりしていこう、「暮らしを楽しむ」というところからの再スタートだね、と皆で確認しあった。



それは、与えられたスケジュールやプログラムをこなし、時間の制限を守り、決められた道筋をこなすために生きる、ということではない。個人や世間の中に残る常識的な「良識」（偏見）から自分たちの感情を解放し、心身栄養を補い合っていく。そして、私たち働き手の仕事は、子らが「今の自分」を知って受け容れながら自分自身を扱い伸ばしていくための、後押しと下支えをするということだった。

子どもの行動の裏にある気持ちに気づけなければ、子どもの困りごとは大人の困りごとになっていく。相手と向き合うのではない。対峙（タイジ）しない。大人側の経験や知識の決めつけや、視界のブロックになってしまうことがあるからだ。



だから、何かにつけて、一人一人に丁寧に・一つ一つを忠実に、ということを中心に掛けた。日常的に、「なんで?」「教えて」と子どもたちに問いかけながら、個々の気持ちを聴くことが増えた。その子らの考えていること、子どもからの発信（訴え・SOS）に気づくこともあった。また、「こども会議」「こどもアンケート」と称して、日々のプログラム、イベントなどについて、

幾度も問いかけた。みんなで成功させるにはどうしたらいいか？ 子どもたちから意見がたくさんあがった。声に出す、言葉にすることを意識したことで、伝える力、行動する力を備えていった。人に伝わった喜びが、個々の自信になっていったのだ。担い手側も、自分という大人のかかわりが、子どもたち一人ひとりの力になったという実感を得られた。私たちは‘コロナ’に負けたわけでも、力を削がれたわけでもなかった。このチャレンジの時機を、有効に使った。



毎日30分間の「PA」は、その日その場を受け持つ全員が参加する。課題を絞り、さらに少人数での取組みをすることもあった。個別に関わる時間が増えたことで、子どもたちがそれぞれに抱えている課題を共有し、一緒に話し合う時間も持てた。暮らしを共にする、でも家族とは違う、フラットな時間の運営を目指した。今、PAとは、みんなが一人一人を待つ、皆に出番のあるワークショップの場であったということを再確認している。

その他の時間も、日々時々、共にパズルを完成させるように、一人ひとりがパーツを担うことから重なったり重ねたりして、関係や時間の厚みを増しながら一緒に場をつくってきたのだった。具体的なエピソードは記せないが、大げさでなく、そんな瞬間がたくさん感じられた。取り換えの効かない対話、かけがえのない場面を生んできたのだという実感がある。ご家族や学校、地域とも絡み合い、厚みのあるサポートを実践することが出来たのではないかと思う。

2022年の夏は、事業継続がどうなるか未知数の、密かに不安定な状況だった。2月に事業譲渡が決まったが、それぞれが自分の芯で立って言動を選択し、仕事に注力できたと思う。

そして、3月末。オープン時代から通っていた子たちの卒業。9年の成長は想像以上に大きく頼もしく、試行錯誤しながら真剣につきあい、生活してきたことが、一気に蘇った。子どもたちやそのご家族に、「フェイスとは一体何なのか」を教えていただいた。その大きさを前に、今はまだ、どう著したら良いかわからない。

● 3期目の保育所等訪問支援

学校・園、保護者、子ども自身の媒介役として、非常に多機能な働きが要る業務である。多忙な教員らとの申送り・引継ぎ事項は書面でこちらから直接届け、随時各所と確認連絡を取り合うなど、行き違いを避けるための工夫を凝らした。また、報告書作成に時間を要するため、保護者には当日中に



速報でレポートするようにした。児童が家庭に帰ってからの生活のつながりや、リアリティのあるサポートの安堵感を得ていただけになったと思う。毎月の連絡・調整を重ねることから始まり、実践を通じてそれぞれの園・学校の方針や特徴を学びながら、中立・間接的立場から相互の関係を重ね、児童・家庭の支援に双方向からの

厚みを増すことが出来つつある。

訪問支援員の仕事には、直接支援とは別の視座の技能や職域を要するため、担い手養成には時間と実践の場数を要する。よって今期も利用者募集は積極的におこなえなかったが、相談支援機関や保護者からの問合せと関心度が格段に増しており、顕在化しつつあるニーズを実感できた。継承されて発展すれば、地域に循環する関係性が育まれる大きな一助となりうるだろう。



次に、これまでの療育テーマと学びの歩みを記しておく。

第1期 2014年度「自分を知る・お互いに知り合う」

日常の挨拶やマナー行動が定着していったことによって、自分や他人への関心や自覚の芽生え、コミュニケーションの広がりや深まりを生み出した。

第2期 2015年度「自分の身体を扱えるようになる」

【遊びが学び】のコンセプトに沿った成果を獲得しつつある。集団の遊びを楽しみ、自分の気持ちを自覚し、表現出来るようになってきた。他者への関わり合いの力と意欲も発現。

第3期 2016年度「衣食住に密着した暮らしの体験」

興味と役割を持って生活を楽しんで営めるように、仲間と、または一人で。暮らしがしごと・食べること・着ることにまつわる様々な所作を循環させ、生活力へと結んでいく。

第4期 2017年度「食とコミュニケーション」「自分を知る・人に伝える」

色々なものを食べ、時に作り、新しい味を知りながら、言葉や行動を引き出す術とゆとりを持てるよう共にチャレンジした。支援される自分・支援される立場から、支え合い助け合う自分たちへ。

第5期 2018年度「道具をつかう」

人と一緒に取り組むことや外出の機会を増やししながら、最大の道具である「言葉」でのコミュニケーションを重視。希望をもった生活設計、喜怒哀楽の表現がより豊かになった。友だちとの輪、放課後の自由な遊び時間と放課後の集団を、子どもたち自身が獲得していった。

第6期 2019年度「比べる」

決して優劣をつけるのではなく、自分と人との強みや違いを知ることで、視野を拡げ自意識を深めていく。感覚や好みの違い、喜び・悲しみ・心配・共感など様々な気持ちを感じ伝えて交わすことで、個々が主体となって意見・希望・不満を言える環境や関係性が築かれていった。

第7期 2020年度「役割」

コロナ禍や長引く休校。不便さや不安を共にし、長時間共に過ごしたおかげで、人を思いやる現場が培われていった。相談する・代弁する・人のことを認めて、相手を称える。自分たちのフェイスを「つくる・守る・育てる・大事に思う・大事にする。」責任感をもつという役割を果たしながら、自分たちの「らしさ」を形成していった。



第8期 2021年度「協調と調和」

人との関わりや生活体験から自分の役割をつとめようとする中で、折々に不調和や分断を経験しながら、子どもそれぞれの新たな力・心模様・具合や加減の旨さが発現した。子ども同士の相互関係においては、大人からの学びの提供だけではなく、自身が場の主となって先導していく言動が見られた。さらに、日々のつきあいや、自由で情緒的な関わり（年長者への憧れや模倣、仲間意識の醸成など）から現れた明確な人間性の伸びは、次の目標へと高まった。

● **運営体制・周辺環境**

新型コロナウイルス感染症については、保育部門同様、22年度10月まで職員の濃厚接触者・陽性の発現は見られず、児童・家族の出席状況も比較的安定しており、実績も好調だった。しかし11月初めに管理者が発症、事務所機能が停滞し、4日間の臨時休業を決断した。その後、幸いにも感染の広がりや状況の悪化はなかったが、日常からの健康維持管理が重要な仕事のうちであることを痛感した次第。ご家族や職員に負担を強いてしまった。

2022年度当初、コロナ禍の状況を受け止め、現実的かつ抑制気味な予算を組んだため、実績は97%と近似値。額としては100万円強下回った。これは放デイ平日93件分に相当する。

新規人材登用は奮わずながら、短期間限定とはいえ若手児童指導員の登用が叶い、加配体制を固守。当期もやはり有償/無償のボランティアスタッフの存在と包容力が大きかった。職員・利用者家族の応援や、遠方からの視察、来客が大いに励みになった。

2022年度 保護者アンケート回答まとめ

<https://workcreche.org/wp-content/uploads/2023/05/2022enque.pdf>

<送迎サービスについて>



認定こども園の送迎バス児童置き去り事故の発生を受け、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課より、障害児通所支援事業者に対しても、車両による送迎業務の点検と安全管理の徹底について指示や調査（意見聴取を含む）を受けた。ここに、かねてからの問題意識を記しておきたい。



これまで20年以上送迎サービスを担ってきたが、模擬体験の実習やリスク事案を想定した実演研修を実施するなど独自の送迎マニュアルをつくり、また子どもたちにも交通ルールや車の仕様について（ランプ、ベルトの意味等）伝えてきた。障害児通所支援を始め、素人の運転者の送迎サービスが初期設定としてあるのも、必要で有難く尽力するけれども「大丈夫なのか？」と首をかしげつつ、自分たちは自社の研修だけでなく、協議会や諸団体との情報共有や事例検討をしながら、学校関係とも連絡体制をとって運営してきた。

一方、車中への児童の「置き去り」はありえないとしても、たとえば、「エンジンをかけたまま児童（先に別の学校で載せた子）を車に置いたまま次の学校に行き、子を一人または複数名載せたまま降りて出ていく」とい



うことは問題意識なく行われているところがある。また、「シートベルトの非着用」などは未だに目につく。他にも、事故・事件にまで至らないものの、特に駐停車時の、心理面を含む安全確保や危機意識の希薄な事例が散見され、注意喚起はするものの、新規事業者の増加や送迎担当者の交代も手伝ってリスクと課題が減ることはなかった。免許制度の是非や保険の整備の如何については他に議論を譲るとしても、現に事業の一端として送迎を担う事業者としては、「装置」の設置を義務付けてヒューマンエラーを回避するだけでなく、各現場や地域単位での不断の研鑽努力や意識・技術の向上が不可欠かと思う。

● 事業譲渡に至るまで <9年間管理者であった法人代表和久の所感> 2023年6月末記述

実は2022年の初頭、通所支援事業の閉業の可能性について、職員に伝えたことがある。理由は、人材不足。そしてその代用の効かなさだ。役職や職能の属人化や、各人の職能や職域が先鋭化・複雑高度化したからというだけでは言い足りない。創業時から共に仕事や関係を築いてきた仲間が、ライフステージの変化などにより職場から抜けていくと、代わりにその場の気運を醸し、個の安全を守り受け持つ「人間」はすぐには現れない、という焦りと粘りが、混然一体となっていた。つまり、品質の劣化と予測せぬリスクを恐れた。数年前から近い将来の担い手不足を懸念し、保護者に紹介を頼んだり大手求人サイトに少なからぬ課金をしたりと採用活動に尽力したつもりが、なかなか功を奏さずにいた。



地域の中で小さく身を寄せ合って家族的な運営スタイルであり、収益性が乏しかろうが顧客層が少なからうが業にしてしまう地域福祉型の事業スタンスは、草の根どころか泥臭い。地域の市民活動や住民自治が衰退気味になる中において、「NP

〇」は、どこことなく忌避される傾向にもあり、一般社会からも幅広い信頼や付託が得られにくくなっているのではないかと感じている。近寄りがたく、流行らないのである。

また、現下、市内では最古参の障害児通所支援事業者でもあるが、大規模寡占化する保育・療育市場や、飽和状態ともいえる福祉サービスのビジネスモデル活況の中においては、そろそろお役御免ではなかろうか。2020年以降、そのように自問自答してきた。といつつ、自称不滅の絶滅危惧種として異彩を放てたら良かったのだが。事業存続への危機感だけでなく、仲間や先達が現場を去りゆく喪失感も大きかった。そのような雰囲気が、周縁に漏れ出て影響していたに違いない。

とはいえ、障害福祉サービスは、どんな困難があっても「では」と終えてよいものではないのは家庭生活と同じ。そうそう休業も廃業もするものではない、という覚悟を持ってやってきた。しかしその実は、自分たちで築いた理想形に近づきつつある場の運営に居心地を良くして、籠城するように動かぬ孤高の零細事業者に成り下がっているのだ。せっかくの人材や実績を活かした事業拡大路線もとれずにいた。反面、「認定NPO法人として」このままではいけない、という思いも大きくなっていった。混乱していた。そのまま、晩秋に自分がコロナ感染で寝込み臨時休業まで至ったその先には、ついに自分自身の胆力が底をついた感があった。成長しない者の下で、個々人の力や組織や事業が、これ以上伸びるわけがない。やめよう。

2023年冒頭、全体会議（臨時総会）を招集し、認可外保育施設を含めた主要事業の閉業を諮った。これはいきなり降ってわいた道筋ではなく、昨年度の報告書にもこの方向性を述べてはいた。この地やこれまで仕事で得られた数々の縁との去就、自身の進退に対峙しなければならない事態。自分で自分の骨を拾う覚悟だった。



そこでは、出席者から、改めて個々様々な思いや考えを聞くことができた。全て実直で確かな意向であり、反対意見にも正しい筋道があり、いずれも力強く、有難かった。この時、正式には閉業の議決をとったわけではない。それでも皆には、現状を受け止めて、次の道を辿ることを依頼した。この状態のまま終焉することを誇りにしよう、と思っていた。

しかしその直後からの関係各所や諸先輩方への連絡・相談の巡りの中で、この度の譲受法人経営者との数年ぶりの邂逅^{かいこう}があり、事業承継の道が一気に拓くことになった。2月初めには前言撤回。年始に随分恰好をつけた割に二言あり。決断が右往左往したことに違いはない。覚悟して腹をくくっていた職員諸氏を四苦八苦七転八倒させてしまった。ご家族や関係者・支援者の方々にも相当なご負担とご心配をおかけし、大変申し訳ございませんでした。

その後の状況については、ホームページのブログに概要を掲載した。

【大切なお知らせ】主要事業の譲渡及び閉業につきまして <https://x.gd/LvC4d>

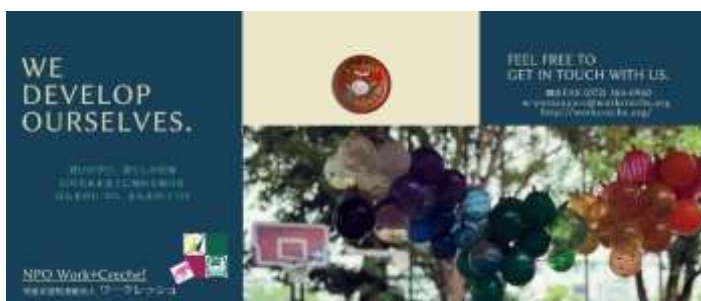
● 総括と、これから

フェイス3事業を通じ、「本人主体」「子育ての仕方支援」「地域の暮らし」を軸に、どのような状況においても親子の関係性や暮らしを常に応援しながら個々の心模様をつなぎ合わせていくためにも、一人ひとりの技能や度量に頼らず、協調の力を上げていくことが急務となっていた。都市化・少子化・核家族化からコロナ禍にあって、幼児期前期からの発達等の課題があがってくる現実も突きつけられていた。

そんな中、「支援」とは何か。もう一度、考え直したい——。年度初めには、現場からそのような言葉があった。イチからやり直してきた2022年度。本人、そして家族との関係性を大切に。今後の行末や仕事の成績、方向性に対し、迷いや不安がなかったわけではない。しかし現場は、一人一人の覚悟を持って、日々たんと、忠実に、誠実に、丁寧に、今あることに向かって懸命に、最大限のつとめを果たしたと思う。



よく言われる、この社会で「共に生きる」ということについても、たびたび考えた1年だった。退職する職員から「仕事だけど、生活^{life}だった」という言葉があった。職務の中で、役目や形を追うのではなく、一人の人間として、人にも作業にも携わった。共に時を過ごしてきたご家族や子どもたちは、どうだったろうか。



これまで、
We develop ourselves...
「私(たち)は私(たち)を開発する」というスローガンを抱いていた。ここに関わる人たちが、仕事や役割を通して視野を広げ、自分の考えや思いやりを表現し、社会の中で力をつけて働いていく—

—そんな仕事と関係をつくるのが自分の仕事と役割だと考えていた。しかし2023年5月末日の閉業に際し、「ここでの勤めは、自分にとって回復^{回復}だった」と言った人がいた。まさしく、私自身もすくわれ、生き直しをしてきたし、自分も人も、ケアとエンパワメント(手当と回復と勇気づけ)し合う場だった。

このように、「多様な人たちが、互いを見倣って、共に育ち合う社会をつくる」という目的を、道中語らずとも皆自分たちの身の内や仕事の中で達成してきたのだと思う。この心を、ここで働いてきた各人がそれぞれに失わず、これからも一層、自信と誇りをもって生きてはたらき、人と出会いつながり続けていけるようにと切に願う。事業自体は次代に継いでいき、その縁の力を携えて、法人はまた新たな本懐の道筋に向かって踏み出すことにしたい。



(3) 大阪狭山市市民公益活動促進補助金事業「市民の学び屋 Gatcha!」



● 運営状況・課題

① ことのばワークショップ

諸タスケジュールの遅延等が生じた。会場予約が予定通りに出来ず、開催日時・場所の安定確保が叶わなかったことに加え、講座準備（教材研究・資料準備含む）及び広報もとのえられず、事業開始時期を4ヶ月延期し、食の部活動と同時進行の開催とした。さらに、新型コロナ感染による他部門の人員不足のため、1回中止。講座内容を順延し、第6回交流会の代わりに、別途会合の機会を2回設けた。遠方から参加希望があり、3回目からハイブリッド開催としたが、不慣れなためロスタイムや途切れなどを生じさせ、全体の運営が滞ることがあった。

参加者の約9割が旧知の仲であり、皆テーマやワークショップに対し意欲や知的関心の高い人たちであった。広報誌やSNS等から問合せや申込みのあった方（5名）は、直前でキャンセルになった。その後のフォローアップもしにくかった。SNS等ではレポートや案内をしてきたが、市の補助事業とは言えNPO団体の主催する取組とあって、実際の動員にまではつながりにくいという弱みがあった。後日、「実は参加したかったが」というお話も数件あった。

② 食の部活動

多様な参加者層ということもあり、毎回の献立や手順を視覚化して示す他、活動のコンセプトを常に確認して伝えることが必要だったが、日常業務から捻出して準備と配慮に割くマネジメントの質量は、十分とは言えなかった。集客と運営とのバランスをとることが難しかった。（たくさんの人に参加してもらいたい、担い手が不足すると運営上のリスクが生じるため。）多様な参加者の個々のニーズに対応するためスケールメリットは期待できず、参加費を値上げすることにもつながった。託児・託老の依頼はなく、幅広い層が全員参加した。

多岐にわたって取組をPRしたが、問題意識や好奇心をもって情報をさがし、行動できる家庭の層からの参加が多い。費用負担だけでなく、訴求イメージの齟齬や申込み時のハードルが大きかったかもしれない。それでも、回を重ねるごとに、広報効果や紹介による新規参加者が増えていった。



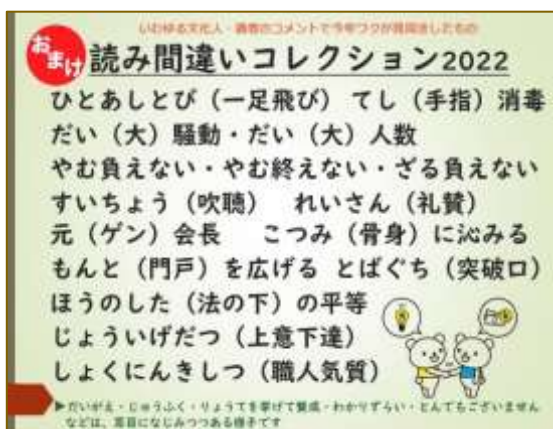
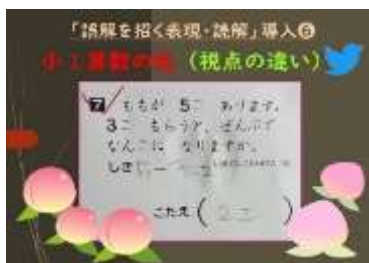
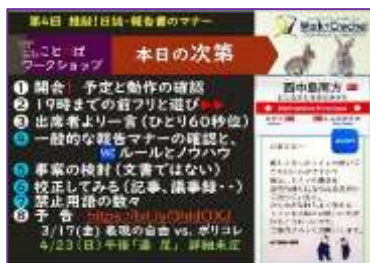
● 成果とこれからの展望

当初の計画の通り、年齢層や属性など重層多様な参加者が得られた。参加者と児童保護者らから、現場運営や事務の援助（広報ツールの作成や機材の貸与・アシスタントスタッフとしての参画）を受けることができた。開催の前後にわたり、企画提案や有志での協力が得られ、まさしく Gotcha! の名にふさわしい、事業の枠を超えた交流や活躍の機会が生まれた。PR や資料作成のため、PowerPoint・ネット辞書・動画/画像編集ツール・Zoom などの Web 会議アプリ・イベント告知サービスなどのツールを導入・多用した。

双方のシリーズともに、多岐にわたるテーマに挑戦したことで、当初予測していた課題や複雑な現実を直視することになった。

（日常生活体験や交流の不足感や、大人から子どもまたは支援/被支援の不均衡な力関係・少々過度な手助けなど。）

今後は、無料開催を基本として寄付や協力を募り、法人の自主活動として発展・継続していきたい。食の部活動は、公民館以外にも場を広げ、地域の団体や事業者とタイアップして、必ずしも「食」にこだわらない体験・交流の機会へと広げる。こののばワークショップは、オンライン/現地開催、集団/個別、講義/ワークショップの手段を合わせながら、テーマやレベルを細分化し、時間と回数を重ねていく。専門性や社会課題をテーマにする場合、講師を招聘するなどして、参加者の知的探求心に応えていく。いずれも、より高度で広範囲な学びと、運営面での熟練を要する。



こののばワークショップ(資料より)

IV 理事会その他会議の開催状況

● 理事会

- ・ 6月16日(木) 前年度事業の総括
- ・ 9月30日(水) 上半期人事考課、基本給の引上げ(障害福祉サービス等処遇改善手当を含む)について
- ・ 2023年2月3日(金) 障害児通所支援事業を譲渡する件



この他、日常的に ChatWork「理事会」グループ等にて
随時、報告・相談・情報交換した

- 認定NPO法人申請(2022年3月31日申請済)
認定のための現地調査 7月8日(金)
認定決定 7月15日(金)
(有効期間2022年7月15日から2027年7月14日)

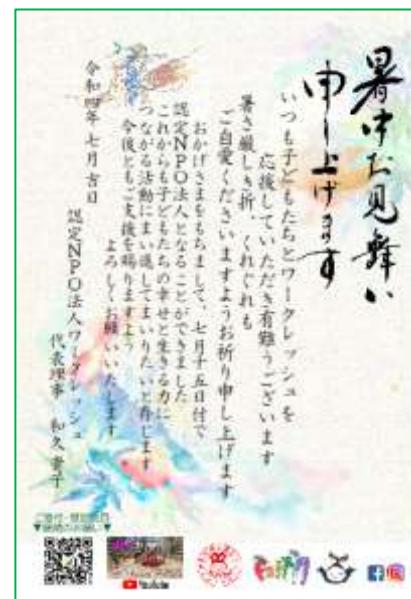
● 第20回 通常総会

2022年6月23日(木) 10時半~12時半

於) ワークレッシュ1階居間

正会員総数 11名

出席 11名(本人出席8名・委任状出席3名)



<議事>

- 1) 出席確認、議長選出
- 2) 第1号議案: 第20期事業報告(2021年度)
- 3) 第2号議案: 第20期収支決算報告(2021年度)
- 4) 第3号議案: 役員報酬
- 5) 第4号議案: 第21期事業計画(2022年度)
- 6) 第5号議案: 第21期収支予算(2022年度)
- 7) 第6号議案: 議事録署名人の選任に関する事項



● 全体会議、職員研修等

<全体会議>

2023年1月12日(木) 10時30分~12時30分

次年度以降の事業転換・展開について

<臨時総会>

2023年2月10日(木) 10時30分~13時00分

障害児通所支援事業の譲渡について他



<全体研修>

2022年5月12日(木)

障害者虐待防止・権利擁護研修より伝達研修
フェイス『スタッフガイド』の読み解き・再検討
資料/記事紹介・意見交換 (虐待防止委員会主催)

<職員研修>

2022年9月3日(土)

新世界周辺フィールドワーク・映画『かば』鑑賞
(西成区民ホール)・大阪ナイトクルーズ

【2022年度 会員数】

正会員 11名

賛助会員 49名

寄付者 35名



忘年会 @割烹高野



以上